資料５－２

第１回会議（８月６日実施）でいただいたご意見一覧

項　目	ご意見
指標について	親世代の朝食欠食率に対し、子どもの欠食率が低すぎる。実態と合わないのでは。 調査方法が知りたい。
	指標の項目が多すぎる。細分化しすぎず、一般の方にも伝わりやすいよう項目を絞ったほうがよい。
	ターゲットに合わせた、ターゲットの実態がわかるような指標としていく。
	何が一番大事なのかということを１つ２つにしぼる。
	何が食育なのかは、年代、性別、属性によって受け取り方が多様であると思う。 その多様な人へ食育が伝わるように。
	一市民として「食育をしているか」と問われると正直自信がない。 食育の正解がものすごく高い所にあるように感じる。 「朝食を食べよう」など明確化した方が目標のゴールが見えるのでは。
対象について	「子育て世代」「若い世代」よりも、もっとはっきり対象の明確化を行い、ペルソナを設定し、その人だけが変わるのではなく、結果として周りも変わっていくような方向性にした方がよい。
	誰を変えたら新潟市の食育というものが次のステップにいけるのかを考える。「食育をしていますか」と聞いても、「食育」という言葉の意味を知らない人は多くいると思う。
アンケートについて	市民アンケートの回答数は高齢者の方が多かったということは、今出てきている現状と課題というのは、若い世代の現状というよりは、アンケートに回答する時間のある高齢の方々に対しての結果が表れているのではないか。
食の課題について	現場の感覚として、子どもたちと保護者で一緒に向き合って食べる場面が少ないように感じることが多い。
今後の施策の展望	子ども食堂において、実際にどのように食が提供されているのか、どのようなニーズがあるのか把握し、盛り込んでいただきたい。
	食育の基本は、美味しいものを美味しいと思うこと。それがないと食育ではない。 子どもたちにそれを知ってもらうために、20 代 30 代の親世代へ幼稚園や保育園のルートを使い、子どもたちを変えていくような働きかけができればよい。
	教育委員会が積極的だと学校も積極的に参加していただける。学校自体が参加すると、子どもだけでなく、それにつられて保護者も積極的に参加していただけて、よいループが出来上がる。
	お腹が空いて美味しいものを食べるということが基本だが、お腹が空くということが分かっていない子どもたちが増えているのかなと危惧している。これから子どもを出産する妊産婦へのアプローチも大切。
	食品ロスの分野でも子ども食堂は非常に大きな役割を占めている。子ども食堂と連携し、子どもたちや地域の家族に対する食育の場になっていくようにサポートしていくことはとても意味があると思う。
	「食育マスター」をステータス化し、もっていることが指導者としての利点となり、教育機関や事業所等から依頼が来るよう PR し、仕向けていってはどうか。